

## 樋渡先生の思い出

樋渡宏一先生は、2009年3月7日に肺炎のため88才の生涯を閉じられた。弟子や友人は、それぞれの思いでお通夜や告別式に参列したであろう。また、遠くにあっても樋渡先生を知る者は、それぞれの思いを胸に樋渡先生を偲んだであろう。樋渡先生の追悼文は、すでに42巻1号に高橋三保子氏によって書かれているので、この文章は、私の樋渡先生の個人的な思い出である。樋渡先生を知る方々と思いを共有できればと思い、また、現役時代の樋渡先生をご存じない若い人たちにも樋渡先生の人柄と当時の樋渡研究室を感じていただければと思う。

それは一本の電話から始まった。1976年の夏、樋渡先生から、奈良女子大学の高木由臣先生の研究室に電話がかかってきたのである。一度、仙台に遊びに来ないかとの電話で、卒業研究で高木研に配属され、たまたま電話のそばにいた私は、高木先生について仙台に行った。初めて樋渡研究室を見学し、ここに来たいと願った私は翌月の大学院の入試を受けて、4月より樋渡研の一員となった。人生のターニングポイントは後から振り返ってそうだといえるので、当時は気がつかないこともある。しかし間違いなく私の人生の歯車が大きく回った瞬間であった。

当時の樋渡研究室は、樋渡先生以下、ポスドクを含め十数人がひしめく研究室であった。それは大きなカルチャーショックでもあった。関西弁とは違った言葉が話され、会話のテンポもつかみにくかった。小学校から女子ばかりの学校にいた私は、男性と机を並べ、話することにも強い緊張感があった。研究室でも、純水を入れた20リットルの容器をかついで4階から5階へ運びあげることが、始めはできなかった。そんな中で一番驚いたのは、教授を「さん」づけで呼び、教授も学生も対等に研究上のディスカッションをする樋渡研の雰囲気であった。議論は、酒も入って、よく深夜にまで及んだ。

樋渡先生は、先生と呼ばれることを嫌っておられ、私たちは尊敬と親しみをこめて「ボス」と呼んでいた。だからここでも「ボス」または「樋渡さん」と呼ばせていただく。ボスは朝から深夜まで、いつも仕事をしておられた。論文や本の執筆、研究費の申請、もろもろの会議。その中で、私たちが行くと、どんなに忙しくてもボスは仕事の手を止めて、私たちの話を聞いてくれた。教授室と実験室の間のドアは常に開け放たれ、ボスの部屋の半分は皆がお茶を飲んだり、ラーメンを作って食べたり、ディスカッションをする場所となっていた。私たちが論文を書くと、あっという間に見てくれて、そこには徹底的に赤インクが入っていた。今もその原稿は手元にある。私が論文を書き始めたばかりでひどい英語の一つ一つが丁寧に直されている。学生の英語を生かして修正することは、ご自分で書くよりもずっと骨の折れる作業であったろう。樋渡さんの細やかな指導に頭が下がる。

ボスはデスクワークだけでなく、自分の手で実験をすること、常に現役の研究者であることを大切にしておられた。電話がかかってくるおそれのない日曜日の朝などは、生き活きと実験をしているボスの姿があった。樋渡研では、論文紹介のセミナーと自分の研究を発表するセミナーが

あったが、ボスもその順番に入っていて、研究発表では自分で行った実験を発表され、私たち院生の容赦のない批判にさらされるのであった。今、私たちの世代はまさに雑用の降りかかる大学などの職場にいるが、自分の手で実験をする時間を確保することが、どれほど難しいことか、それを自らに課してこられたボスの研究に対する情熱と真摯な姿勢にうたれる。そして自分の実験についても院生や学生にオープンな議論をさせたボスのフェアな態度にも心うたれる。

ボスのエネルギーは学問分野だけにおさまらず、外へ発散していた。樋渡研には、春は山菜狩り、秋は芋煮会、冬は忘年会という年中行事があり、また不定期にやるコンパの数があまりにも多いので、酒屋さんとすっかり親しくなってしまった。電話をかけて「あの、いつもお願いしている青葉山の・・・」と言っただけで「ああ樋渡研さんですね」と返事が返ってくるようになった。いつだったか、ビールを6本注文したら、「それでは足りないでしょう。10本お持ちしましょう」と言われたことがあった。もちろん飲んでばかりはいない。春・秋はテニスにソフトボール、冬はスキーと、体を鍛えることにも精を出した。ボスはテニスが上手で、樋渡研内ダブルスの試合ではたいてい優勝していたし、生物学科研究室対抗ソフトボール大会でもファーストを守っていた。そしていつも真剣だった。いつだったか、私がピッチャーで一塁に送球したらボスがポロリと落としてセーフになったときなど、悔しそうに「山なりのボールを投げるな！強いストレートをよこせ！」と怒られた。そしてスキー。生物学教室の5階の男子トイレの窓からは、泉ヶ岳の頂上が見えるようで、そこに雪が積もったことを確認すると、ボスはうれしそうにスキーに行こうとみんなを誘うのだった。毎年、ボスの誕生日のある2月には、生物学教室のいくつもの研究室がいっしょにスキーに行った。同じ宿に泊まって、昼は蔵王の全山を滑りまくり、夜はきまって酒盛りだった。この3泊4日の「スキー合宿」を乗り切るには体力だけが頼りだった。ボスのスキーは、得意のスケートを生かした、足を交互に出す独特の滑りなのだが、この滑りは誰も真似ができないだけでなく、めっぽう速かった。ボスはリフトを降りるや否や、急な斜面を矢のように降りていき、ときどき下でパッパパーンとこけていた。上から眺めていた私たちは、無言で、同じ斜面を何度かターンしながら、やっと降りていくのであった。「1シーズンに3回くらいは、もうこれでダメかと思うくらいコケる」とこともなげに言っていた樋渡さんを思い出す。その勇気とチャレンジ精神はボスのエネルギーの源なのだろう。

そうして研究室の内外で、すっかり樋渡研に適應した私は、大学院を出たあと、ポスドクとしてアメリカへ渡った。まもなく、世界の研究室では、毎日酒盛りをしているのではないこと、誰とでも自由に議論を行えるわけではないことを知ることになる。樋渡研にいたときのように、自由にもものを言っていた私は、**supervisor** である、C教授に何度も **warning** をもらい、遂にはオフィスにひっぱっていかれ「おまえは反抗的である」「だれがここをオーガナイズしているんだ」と叱られた。やるように言われた実験はどう考えても納得がいかないのに、別の方法を試すべきだと言ったまでである。しかし、彼はそうは思っておらず、違った意見を述べるのが、彼に対する反抗だと思ったようだった。初めは冗談かと思ったが、本気で怒っていることがわかり本当に驚いた。そのうち、クビになることは避けたかった私は、自然に口数が少なくなり、言われたことだけをするようになった。そうすると表面的にはなごやかに仕事をしているように見え、データもそれなりにたまる。だがこれでよいとはどうしても思われない。そのうち、樋渡さんの恐れていたのはこういうことなのだということが気がついた。教授だから、先輩だからという理由で、若い者が研究上のディスカッションに精彩を欠くことをボスは恐れていた。「たとえ技術や

経験が伴わなくても、自分のもてるものの中から意見は言うべきものだ。知らないゆえにこそ、優れた意見が出ることもありうる。」それをボスはくどいほど強調してこられたし、自由にもの言える研究室を何をおいても大切にしてくださいとこられた。研究室の長という立場にあれば学生の力を自分の研究にすべてつぎ込むこともできたであろうに、ボスはそうされなかった。私たちのもつ興味のひとつひとつを掘り起こしてディスカッションし、それらを研究テーマにまで高め、どんな生物学上の問題を解決することにつながるのかを共に考えてくれた。データの数を問題にするのではなく、それを得るプロセスを大事にされてきた。はやりの研究に流されるな、生物学で何が大切なのか、何をやるべきなのかを常に自らに問いかけよと言われた。そして、自分自身の研究よりも、学生を育てることに時間と力を注ぎ、学生と接することを心から楽しんでおられた。樋渡研の外に出てみると、樋渡研の良さ、樋渡さんの偉大さを改めて感じ、樋渡研の中で学んだものが私自身の中にしっかりと根を下ろしていることに気がついた。

アメリカでの滞在で二年目に行った **Bloomington** のインディアナ大学では、リベラルな考え方の **John R. Preer, Jr.** 教授のもとで、私は大きく研究を進めることができた。ここにはアメリカ全土やヨーロッパから客員研究員やポスドクが集まっており、生涯の友人もできた。そのいくつかは国に帰って、自分の研究室をもつ身となり、今も学会でよく顔を合わせる。

ここにいるときに、ボスが訪ねてきてくれたことがある。ちょうど東北大学を退職された直後だった。**Bloomington** は、ボスにとっても昔 **Sonneborn** がいた頃に研究をしておられた思い出深い場所である。「これは思い出を探すノスタルジアの旅だよ」と珍しくセンチメンタルになっておられたボスを車に乗せて **McCormick's Creek** や **Brown County** を一日ドライブした。ボスの大好きな **Dogwood** (ハナミズキ) と **Redbud** (アメリカハナズオウ) の花が、この時を待っていたかのように満開になり、ボスを歓迎しているようだった。私もこの時に **Bloomington** にいて、ボスを案内できることの幸せをかみしめていた。

その後、私は日本に帰ってきていったんは就職したものの、医科大学の雰囲気になじめず、打ちひしがれてイタリアへ行くことを決意したときに、ボスは手紙をくださった。

「狭い日本の中で無理してがまんしなくとも、世界という広い舞台の中で、是非あなたを必要としている研究室があるのだから、それはすばらしいことだと僕は思います。そこには、小さな安定はないかも知れないけど、大きな飛躍の舞台が待ってますよ、きっと！！」

ボスは、私が何かをチャレンジするときには、いつも背中をおしてくださり、チャレンジする私を評価してくださった。女性ということでも、ボスは決して手加減をしなかった。初めのころ自分の意見を言えない私をよく叱咤された。それは孤独な女子学生にとっては絶望的とも思われることだった。自分は樋渡研では取るに足らない存在なんだ、ボスに嫌われているんだと思っていた頃もある。繊細で傷つきやすく、頭も良くない私を、ボスはおそらくとても心配されていたのであろう。だからこそ、研究者として生きていくために必要な強さを、多くの経験を積むことによって身につけていくしかないと思われていたのではないだろうか。

イタリアに行き 6 年後、私が長い放浪ののち、30 代の終わりに職を得て奈良女子大学に戻ってきたとき、ボスは本当に喜んでくれた。今、大学で女子学生を教える身になって、どのように彼女らと接するべきかを考えるとき、樋渡さんの指導を振り返ってみることがある。無意識のうちにも、どうかすると女子学生を大事にしすぎてはいないか、強さを身につける機会を奪ってはいないかと思う。それは本人のためにはならないことをボスはよく理解していたのだろう。

以下は、樋渡さんのお葬式で、弟子の一人として読んだ弔辞の最後の部分である。

「目を閉じると私たちが過ごした樋渡研の日々が浮かんできます。

東北大の樋渡研がなくなってから 24 年経ちますね、ボス。この間、私たちはそれぞれの場所で、樋渡研でつちかったものを基盤にして進んできました。できれば、私たちががんばっている姿を、もっともっと見ていただきたかったと思います。けれど、ボスは、私たちの手の届かないところに行ってしまいました。さびしいです。ボスが病気になられても、心のどこかで、ボスは不死身なんだ、ボスが死ぬはずはないと思ってきました。

でも、お墓参りはしません。ボスはきっと「そんなものいらん。石をおがんでどうする」と言われるに決まっているからです。そのかわりに、私たちは、ボスが大切にしてきたものを次の世代に伝えていきます。

さようならも言いません。ボスは、私たち樋渡研の楽しかった思い出のなかに生きています。これからもずっと一緒にいてください。 樋渡研 38 番目の弟子 春本晃江」



Dogwood (ハナミズキ)



Redbud (アメリカハナズオウ)